

平成26年度 文部科学省委託事業

職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進

「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証

インストラクショナルデザインおよびアクティブラーニングを使いこなす
教員養成研修モデルの開発・実証

アクティブラーニング

《 指導書 》

一般社団法人 全国専門学校教育研究会

目次

はじめに	- 3 -
第 1 章 指導要領と実証研修実施マニュアル	- 4 -
第 2 章 実証研修実施記録	- 10 -
第 3 章 事前研修 e ラーニング	- 12 -
第 4 章 事前研修受講者レポート	- 13 -
第 5 章 実証研修テキスト	- 25 -
第 6 章 実証研修受講者アンケート	- 26 -
第 7 章 実証講座評価と研修の課題および今後の展望.....	- 30 -

はじめに

この実証研修全体の目的は以下である。

職業実践専門課程として職業実践的教育を行う上で、企業・業界が求める汎用的な能力向上を行うための教育課程の編成や演習・実習の授業運営を行う教員のコアスキルとして、最も効果的かつ効率的な教育を設計・開発技法を習得するための研修プログラムを開発・実証する。また、グループ学習を行う際にメンバー間でコミュニケーションをとったり互いに助け合ったりする授業手法を教員が身に付けるための研修プログラムを開発・実証する。

その下に、アクティブラーニング分科会は以下を目標としている。

一方的な教示法から言語活動の充実と思考力・判断力・表現力の育成を教育目標に掲げた授業運営を行う能動的学習形態を実践できる教員を養成するための研修カリキュラム・シラバス、教材および研修実施マニュアルを開発する。

実際の開発にあたって特に留意したのは以下の2点である。第1は専門学校で指導する知識やスキルを学ばせる際にいかに学生の意欲を向上させ、習得の効果を上げるかである。ここには伝統的な一方通行の授業形態を乗り越えることが肝要と捉えて、「アクティブラーニング型授業(AL型授業)」を取り入れることとした。

AL型授業とは「学習者にアクティブラーニング(能動的学習)を起こそうとする全ての授業形式」であり、特定の形や技法にとらわれるものではない。定型がないことは専門学校における多様な専門領域を有する分野にはむしろ有用であった。教師が各自の専門分野と学生の状況に応じてアレンジすることが可能だからである。

この点を踏まえ、研修では体験を重視してAL型授業の理解を深めてもらい、その体験を振り返ることを通して、各自の授業改善のヒントを得ることができるよう計画した。

留意した第2は専門学校で指導するスキルは変化の早い時代においては、学生がそのスキルで退職まで仕事をし続けることは困難であると予想されることである。そこでスキル習得のみに目を向けるのではなく、スキル習得の過程で身に付ける社会人としての基礎力(リテラシー、コンピテンシーなど)を、授業の中で意図的に教育することに目を向けた。

ここで基礎としたのは「学習する組織(ピーター・センゲ)」理論である。専門学校の授業そのものを、学習する個人が「チーム学習」を繰り返しながら、「学習する組織」へと成長する過程にすることを意図した。その体験は卒業生がいかなる職種に付こうとも、生涯役立つ基礎力になると確信するからである。

そのための実際的な手法としての「アクションラーニング」の訓練も多く時間を割いて実証研修の中に組み込んだ。これを繰り返すことによって得られる「質問力」や「権限なきリーダーシップ・スキル」などが新しい授業の基礎力になるからである。

この研修の内容が多く職業専門学校における授業の質的向上に役立つことを願っている。

第1章 指導要領と実証研修実施マニュアル

<p>【1. 科目名】 「アクティブラーニング」</p> <p>【2. 担当講師】</p> <p>【3. キャリアパス】</p> <p>【4. 必修・選択区分】</p> <p>【5. 研修形態】 講義、演習、グループワーク等による</p> <p>【6. 履修時間】 12時間（2日間）</p> <p>【7. 研修の概要と目標】 職業実践専門課程として各学生の知識・技術等の習得度を高めるために、「アクティブラーニング(能動的学習)型授業」(=AL 型授業)を設計し、実践し、自ら成長し続けることができる教員の養成を目的とした。 教室を「学習する組織(学習する学校)」として創造することで、学生が社会人としてのリテラシー・コンピテンシーを身に付けることを促進できる教員の養成するために、「アクションラーニング・セッション」を運営できる AL コーチのスキルを習得することにより、授業中をはじめとして学校生活全般にわたりチーム学習を促進し、授業中の介入スキルを身に付けることとした。 AL 型授業についてはまだあまり知られていないので、事前に予備知識を得てもらうために、eラーニングで基礎知識を学んでから研修に臨んだ。</p> <p>【8. 中堅教員研修における本科目の位置付け、受講後の効果】 本科目は、まずは学内の AL 型授業導入に関してリーダーシップを取れる教員に受けていただくものである。したがって、中堅教員研修に位置付けられる。AL 型授業と AL セッションを通して、教員も学生も自ら学習し成長し続けるスキルを身に付けることができるので、専修学校教員として必要なプログラムである。</p> <p>【9. 本科目の修了条件】 AL 型授業体験と振り返りで、気づきを文章化できる。AL セッションにおける気づきをもとに、アクションプランを作成できる。事後に、実際に AL 型授業を実践できる。</p>	<p>【10. 配布資料一覧】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①タイムテーブル及び参加者名簿 ②オリジナルテキスト ③テキスト内ワークシート別紙（要望があれば郵付） ④リフレクションカード用紙（毎日記入、回収。） <p>【11. その他の配布物等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○名札 1人1個 ○模造紙 グループに1枚 ○付箋紙（赤、青、黄）グループに各50枚ずつ <p>【12. 機材】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○講師用PC（スライド投影用） ○プロジェクター （可能であれば） ○タイマー ○マグネットかテープ（模造紙を張るため）
--	--

進行時刻 の目安	単元ごとのテーマ・項目	所要 時間	内容等	教材等	方式
(1日目) 13:00	オリエンテーション	10分	○開講のあいさつ、講師自己紹介	テキスト	
13:10	AL型授業の概説	30分	○研修のねらい ・開発の目的、研修の目標、そしてAL型授業とは何かを簡単に説明 ○世界の流れ、文部科学省の施策などをとりあげて、AL型授業の必要性を説明する。 ○AL型授業の成功例をとりあげて、その効果を説明する。 ○質疑応答を通して補足する。 ～休憩～		
13:40	AL型授業体験	50分	○AL授業の成功事例としての高校物理を体験してもらう。 ○解説プリント、練習問題、解答解説、確認テストの各種プリントはすべて高校の授業で使っているものを使用する。	物理解説用 プリント、 練習問題、 解答解説 確認テスト	
14:30	振り返り	30分	○授業体験を振り返る。 ○「生徒の立場で感じたこと」「教師の立場で気づいたこと」 「自分の授業でやってみようと思ったこと」の視点で振り返る。 ○個人作業→グループワークと進んで気づきを広げる。	模造紙 ポストイッ トカード	
15:00		10分	～休憩～		
15:10		80分	○スキル解説(特に介入のスキル) ○インタラクティブ・ティーチングを心がける。 ○テキスト通りに進める。	テキスト	

進行時刻 の目安	単元ごとのテーマ・項目	所要 時間	内容等	教材等	方式
16:30		10分	○質問による介入の重要性を強調する ～休憩～		
16:40	授業研究と振り返り法	80分	○授業改善と組織開発は両輪という発想を強調する。 ○批判・非難の応酬ではなく、承認と質問のスキルが、振り返りと気づきを促す。 ○「振り返り会」の SCRIPT を示して、その効果について説明する。 ○この方法が古典的なアクションラーニングであることも説明する。 ○授業見学シートは「振り返り会」につなげることを意図していることを解説する。	「授業者を傷つけない振り返り会」SCRIPT、ワークシート「ラブレター」、授業見学用ワークシート	
18:00	1日目終了				

進行時刻 の目安	単元ごとのテーマ・項目	所要 時間	内容等	教材等	方式
2日目 09:00	前日の復習と質疑応答	30分	○昨日の雰囲気再現する。 ○質疑応答に答えつつ、1日目の不足部分を補強する。	テキスト	
09:30	アクションラーニング概説	30分	○歴史、企業における効果について説明する。 ○「学習する組織」の不可欠な「チーム学習」の現実的な方法が、「ALセッション」であることを強調する。	ALセッション用ワークシート	
10:00	セッション1開始	60分	○ALセッション 1回目 ○質問中心の形に慣れる。	規範・ルール等	
11:00	セッション1終了	15分	～振り返り～ 休憩		
11:15	セッション2開始	60分	○ALセッション 2回目 ○つながる質問に気を付ける。		
12:15	セッション2終了	15分	～振り返り～		
		60分	～昼食・休憩～		
13:30	セッション3開始	60分	○ALセッション3回目 ○前半は問題に、後半は解決策に目を向ける。		
14:30	セッション3終了	15分	～振り返り～ 休憩		

進行時刻 の目安	単元ごとのテーマ・項目	所要 時間	内容等	教材等	方式
14:45	セッション4 開始	60分	○ALセッション 4回目 ○権限なきリーダーシップ体験を目指す		
15:45	セッション4 終了	15分	～振り返り～ 休憩		
16:00	全体体の振り返り 質疑応答 理論的補足	10分	○気づきの共有 ○質問に答える		
16:10	アクションプラン説明	10分	○「アクションプランシート」を用いて、 現場に戻ってからの授業改善計画を具体化する。	アクション プランシー ト	
16:20	まとめ	10分			
16:30	全体終了				

第2章 実証研修実施記録

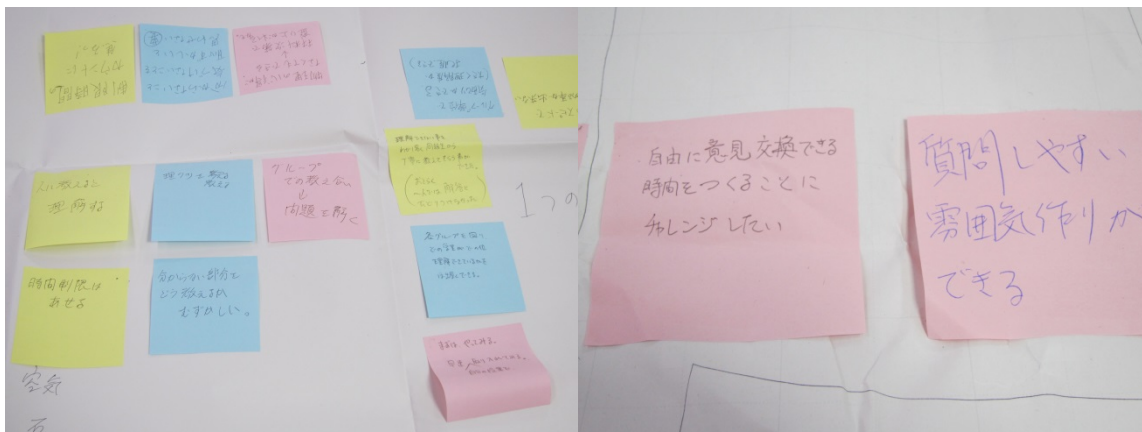
アクティブラーニング研修 平成26年12月20日、21日実施タイムスケジュール

1日目	概要	説明
13:00	オリエンテーション	・開講のあいさつ ・講師紹介
13:10	1 AL型授業の意義	・研修のねらい ・職業実践専門課程とALとの関係 ・ALの授業について ・質疑応答
13:40 ～15:00 15:00～15:10	2 AL型授業体験 高校物理の授業体験	・学習内容の説明 ・解説プリント、練習問題、解答解説、確認テスト配付 ・個人作業⇒グループワーク ・振り返り ・休憩
15:10 ～16:30 16:30～16:40	教師介入スキル解説	・アクティブラーニングにおける教師介入の構造 ・授業プロセスの概要 ・定例介入の概要と構造 ・定例外介入の定義と応用 ・休憩
16:40 ～18:00	授業研究と振り返り	・授業改善と組織開発 ・振り返り会の説明 ・授業見学シート解説 ・振り返り会
2日目	概要	説明
9:00	前日の復習と質疑応答	
9:15	ALセッション概説	・歴史的背景 ・学習する組織のチーム学習とALセッション
10:00 11:00	ALセッション1	・1チーム4名とALコーチ1名でセッション ・1名が問題提示。質問のみで会議を進める。 ・ALセッションを通して、介入スキルを理解する
11:00～11:15	ふり返し／休憩	15分
11:15	ALセッション2	・2回目のセッション体験。チーム2人目が問題提示
12:15～12:30	ふり返し	15分
12:30～13:30	昼休み	
13:30 ～14:30	ALセッション3	・3回目のセッション体験。チーム3人目が問題提示 ・チームビルディングを体感する ・新しい「リーダーシップ」を体験的に理解する
14:30-14:45	ふり返し／休憩	・15分
14:45～15:45	ALセッション4	・最終4回目のセッション体験。チーム4人目が問題提示
15:45-16:00	全体ふり返し	・15分
16:00-16:15	アクションプラン説明	・受講者の今後の授業改善について
16:15-16:30	まとめ、アンケート	講師によるまとめ。事務局からの連絡 他
16:30	終了	

実証研修風景



成果物の例



第3章 事前研修 eラーニング

事前学習でを使用したサイト

ga017: インタラクティブ・ティーチング

https://lms.gacco.org/courses/gacco/ga017/2014_11/about

東京大学/MOOC 講座/インタラクティブ・ティーチング

week1 「アクティブラーニングについて知ろう」	講義 10 回
week2 「アクティブラーニングの技法」	講義 10 回
week3 「学習の科学」	講義 10 回

第4章 事前研修（eラーニング）受講レポート

6名抜粋／都道府県行政順

1-1

一般社団法人 全国専門学校教育研究会

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	科長補佐	学科名	保育福祉学科
教員歴	18年	都道府県	岩手県

● eラーニングの感想

アクティブ・ラーニング、AL型授業といった言葉を近年よく目にしたり聞くようになり、参加型授業ということであろうと凡その理解で捉えていました。
本講座を視聴し、アクティブ・ラーニングとは能動的学習の総称であり、多くの学校で導入が進んでいる現状、そしてその手法には様々なものがあることを確認できました。
目的に応じて適切な手法を選択して実施していくことで、学習効果、定着度にも影響するため、教員はより効果的な授業方法を設計しつつ、目の前の学生の姿に応じて、臨機応変に工夫をしながら授業を実施してく力がこれまで以上に求められます。
教員が学生に対して覚えて欲しい事柄を一方向的に教えるのではなく、学生が自ら考える機会、伝える機会を積極的に提供しながら、モチベーションを高め、学ぶ価値、目標を達成する意義を明確に持てるように、教員が学びをデザインすることで学習効果の向上につながる事が理解できました。

● AL型授業の広がり理解して、気づいたこと、感じたこと

AL型授業と言われている学びの型は、私たちが生まれながら持ち合わせている自然な学びの姿だと感じました。それがいつしか、知識や技能をより獲得せねばならないという仕組みにはめ込み、はめられ、一方向の講義型授業で直近の目標に向かって教え込む、教え込まれることに慣らされてしまっているように思いました。振り返って見れば、受験のためにはそうでなければならなかったわけですから、日本の社会の仕組みそのものがそれを尊重した結果の学び方だったのだと思います。しかしながら、社会は多様化しているわけですから、知恵を出し合い、様々な局面を乗り越えていく力が求められています。それは学んだ知識と技能を活用する力です。かつて、これは社会に出てこそ身につくものと思っていましたが、学校での学び次第で獲得できる力です。学校で獲得した力を基盤に、学生がその後の社会で自信を持って活躍できるように支援すること、それが教員の役割であると改めて感じました。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	科長補佐	学科名	保育福祉学科
教員歴	18年	都道府県	岩手県

●自分の授業改善の目標と課題設定

<p>知ってほしい、覚えてほしいという教員側の思いで、知識伝達型の授業が多くなっています。</p> <p>学生の様子、反応を見ながら、モチベーションを高めようと、投げかけや発問を毎回しますが、クラスによっては、返答を期待して教員側の発言量が多くなってしまっていると感じています。</p> <p>1コマ（50分）、2コマ（100）の授業や科目毎に、学習意欲（モチベーション）の維持、向上のための効果的な授業設計の再構築を図りたいと思います。</p> <p>そして、そこにAL型授業を効果的に導入していきたいと思います。これまでも、いくつかの手法を用いた授業を実施してみましたが、グループによっては雑談になってしまい、目標とする学びに繋がらないことがしばしば起こります。その手法を習得し、適切な手法を選択して、効果的な介入のスキルを習得したいと思います。</p> <p>学生一人ひとりの興味や関心、学ぶ意欲に違いはありますが、参加型授業（AL型授業）を通して、思いや考えを言葉にして伝え合うこと、感じ合うことの嬉しさや楽しさを感じて欲しいと思います。</p>

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	学科長	学科名	日本語学科
教員歴	16年	都道府県	富山県

● eラーニングの感想

私は現在、専門学校において、留学生に対する日本語教育と幼児教育学科の科目を担当しているが、日本語教育ではアクティブラーニングがコミュニカティブアプローチという形で以前から幅広く実施されているので、内容としては全く新しいものではなかった。ただ、概念を整理していく過程で、今まで聞いたことのない手法や、アプローチについて詳しく説明されていたので、大変参考になった。また、本講座では演劇分野からの視点を取り入れており、パフォーマンスとしての要素も考慮されていた点が私には強いインパクトがあった。特に学生のタイプによる発問の内容、タイミング等、現場で日々課題となっている点が浮き彫りとなり、難しさを感じると同時に、クラス運営において大変重要な要素であることが再認識できた。
eラーニング自体は初めてではなかったが、今回は課題が明確に出されていたので、ある程度メモをとりながら学習できた。特によかったのは、画面の横にスクリプトが出ていることだ。これによって必要な部分を容易に探すことができ、リマインドすることも容易になっていた。
他にも講座があったので、学びのツールとして活用したい。

● AL型授業の広がり理解して、気づいたこと、感じたこと

私は学校においてFDを担当している。今年度はグループFD活動ということで、アクティブな活動が展開できているが、手がかりとなるアプローチがまだ定まっていない。本講座で紹介されていた「ADDIEモデル」、「ガニエの9教授事象」はその点で、教員研修で活用できるものとして重要なヒントになった。FD活動を考える時、やはり壁となるのは「授業のタイプ」による教授法の違い、指導法の違いである。FD担当としての見解・意見だけではこの壁を越えられない。その点、「AL型授業」という軸ができれば、横断展開がよりクリアになる可能性が高まる。今回、講座の中で紹介されたcoref(大学発教育支援コンソーシアム推進機構)の存在によって、知識構成ジグソー法の活用等の具体的な事例が、あらゆる分野の授業で展開されていることがわかり、専門学校における「AL型授業」の展開に少し自信をもつことができた。
AL型授業は「社会人基礎力」の獲得には欠かせない授業手法である。専門学校ならではのAL型授業が展開できるよう、取り組んでいきたい。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	学科長	学科名	日本語学科
教員歴	16年	都道府県	富山県

●自分の授業改善の目標と課題設定

1. 授業改善の目標
①ADDIEモデルによる授業デザインの構成と実施
②社会人基礎力を養成できるアクティブラーニングの実現
③長期記憶を促すアクティブラーニングができる
2. 課題の設定
①現在、授業デザインはDCAポリシーを指標としてカリキュラムとシラバスを構成すること以外、特に意識することなく組み立てられていた。しかし、それでは「学生の学び」を如何に効率化させていくかという観点に繋がっていない。よってADDIEモデルにより授業デザインを構築し、CLOSE THE LOOPを如何に進めていくかが課題となる。
②AL型授業は社会人基礎力（前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力）を養成する非常に有効な授業手法である。しかし、実際には「なれ合いのグループワーク」であったり「個の能力を引き出しきれないワーク」で終わっている場合が多い。よって学生を巻き込み学生のモチベーションを高め、社会人基礎力養成につながる授業を如何に設計するかが課題
③学習内容が脳裏と心に染み込まなければ、長期記憶にはつながらない。そのためには受動的学習から能動的学習へのシフトが必須である。中でも言語化という作業を如何に有効に実施できるかが課題となる。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	主任	学科名	鍼灸科
教員歴	9年	都道府県	静岡県

● eラーニングの感想

<p>普段の授業で様々な方法(グループ学習など教授の仕方)を試していたが、初めてアクティブラーニングというものについて学ぶことができ、理解が深まるとともに、効果的な使い方をイメージするきっかけになったように思う。また、このような教授法について実践・研究されていたことに驚かされた。</p> <p>「音楽座ミュージカル様のスキル編」については、自己紹介の部分が特に印象的であった。自己紹介は普段から苦手で、それがもたらす影響についてあまり考えたことがなかったが、共感する・注意を引く自己紹介が、その後の授業にもたらす影響は大きいように感じた。先生の性格・人柄・好き嫌いなど、「自己紹介をするひとだけ」についてしか、ポイントがないと思っていたがそのひとが授業を行うと楽しいのではないかと、また、そのひとが何を大事だと思っているかが、その後の授業にも反映されることをとてもイメージすることができた。</p>

● AL型授業の広がり理解して、気づいたこと、感じたこと

<p>アクティブラーニングの技法を学び、教授内容や学生のレベル・質に合わせ、活用したいと思う。また、根本となるモチベーションについても、詳細を学べたことは良かったが、モチベーションが上がらず、どうしても目標を達成できない場合に「どうするか・どこで線を引くか(留年させるなど)」も合わせて検討しなければいけないように思う。</p> <p>授業だけでなく、社内・校内の教職員の相互理解やモチベーションアップにも、アクティブラーニングの技法は活用できるようなにも思う。価値の置き所が異なることは、多様な学生また多様なニーズに対応する(様々な患者様)には、様々であっていいと思うが、相互の授業で教員がどこに価値を置いているのか、また目標としているのかを理解していないと、スキルを統合する際、スキルを適時に応用する際に、うまくいかず、最終的な目標がぶれてしまうのではないかと思われた。違いのあることが良くも働き、悪くも働く、最終的には学生自身が選べるようになるとういことだが、それを今一度考えさせられる良い機会となった。</p>

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	主任	学科名	鍼灸科
教員歴	9年	都道府県	静岡県

●自分の授業改善の目標と課題設定

①自分の自己紹介、授業の自己紹介(シラバス説明)などについて
②モチベーションを高めるため、価値、予期、環境についての現状把握を行い、改善すべきポイントを洗い出す。
③達成価値、内発的価値、道具的価値について、授業のシラバスとともに考え、細分化し、学生にプレゼンを行う。(初回、または教授する範囲ごとの初回実施)
④部分スキルへの細分化およびデザイン、スキル統合のデザイン、スキル応用のデザインを考える。(実技授業だけでなく、学科授業に関しても：医学的基礎→疾病時の変化→治療法など)
⑤アクティブラーニングの効果的な使用場面・方法を考える。(3年次の臨床実習などでは活用場面が多いと思われる。または期末など授業の総復習・まとめの際は、シンクペアシェアから始め、色々な技法へとつなげることが可能と思われる。)
⑥他の教員の授業内容・目標の把握
⑦⑥を踏まえ、どのような学生を育てるか、卒業時に目標とするレベル・質を再検討する

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職		学科名	調理師本科
教員歴	10年	都道府県	大阪府

● eラーニングの感想

・ なかなかのボリューム。一度の視聴では理解が追い付かない。
・ 映像に文字が併記されているので開始から終了までの流れがつかみやすかった。
かつ、省略できるところは省略することができた。とても利便性が高い。
・ テーマごとに、目的、目標が明記されているので到達すべき理解ポイントを何度も確認して進められるので学習しやすい。
・ week1~3 までしか確認できていないが、week4 以降もチェックしようと思わせてくれる。
・ 全体のボリュームは多いが、各 week のボリュームはコマ切れにされているのでやりやすい。

● AL 型授業の広がり理解して、気づいたこと、感じたこと

・ AL 型授業の広がりを理解していないことを理解できた。おそらく、学内の教員の多くが <AL をやっているつもり> の授業にとどまっている。それも個人のスキルに委ねられた実施。
・ 前提として、充分計画立てられた授業設計、目的、目標、AL による効果の設定があるべきなのに、それがあやふやだから。「この授業にはこの AL」や、「このケースは基本設計にあった AL を一部変更してあの AL」というようなノウハウもなさそう。まずは、現在学内に存在するアクティブラーニングの程度を確認する必要があるかもしれない。
・ Week2 のセッション5 の議論は参考になった。つまり、AL を展開しながら理解を深めることを理想としながら現実にはそれについてこない（ついてこれない）学生がいる。入学選考がない本校では、基礎学力・日本語能力・対人関係能力・積極性等に大きな隔たり、AL でそれらに対応できるかの問題がある。どうしても授業に参加できない学生が存在する。見て見ぬふりする訳にもいかない。しかし彼らにひっぱられる訳にもいかない。予防策と対応策が不可欠。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職		学科名	調理師本科
教員歴	10年	都道府県	大阪府

●自分の授業改善の目標と課題設定

自分の担当科目：衛生法規（調理師免許や飲食店営業に必要な許可基準などを考える授業）
授業改善の目標：
ダラダラと教科書の内容をなぞるだけになっているのではないかという反省から、
1コマの目標が細かく設定されていない→1コマにつき、5コ程度の目標を具体的に設定する
モチベーションを高められる誘導がない→1コマにつき、「価値」と「予期」を示す
課題設定：
34種の営業許可区分について、学生にジグソー法またはポスターツアー法による
アクティブラーニングを考える。これによる予防策と対応策を考える。
調理師免許の取得方法について、ピア・インストラクションによる授業の進行を考える。
調理師免許・営業許可・食品表示の授業などで、学生の視点にたった「道具価値」を明確に示す。
1コマを総体として理解しなさいという授業が多いので、部分的なスキル・知識の習得へ分解して、これを細分化された授業の目標とつなげる

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	教頭	学科名	インテリア・建築デザイン科
教員歴	16年	都道府県	愛媛県

● eラーニングの感想

まずは、最近良く聞くようになったアクティブラーニングについて、少しは理解できた気がします。一言でアクティブラーニングと言っても、様々な技法があり、その場面や内容に応じて選択しなければならないことも分かりました。
教え方や学びの方法を様々な専門領域の先生方が真剣に考え、取り組まれていることにも感銘を受けました。
社会から求められる主体性や自分の頭で考える姿勢を、教育現場でどのように身に付けさせるのか、自分の専門領域に置き換えて、考えなければならないと思います。
今回の研修を通して、具体的な科目に落とし込んで、実践したいと思います。

● AL型授業の広がり理解して、気づいたこと、感じたこと

まずは、アクティブラーニングの必要性が良く分かりました。
従来のインプット型の授業だけでは、学生が主体的に考えたり、行動することにつながりません。学生からアウトプットする機会をつくり、それを効果的に引き出す工夫がいるのだと思いました。
様々な専門領域で、様々なALの技法があることも分かりましたが、自分の専門領域で、どの技法をどの様に活用するのか、それがどんな成果につながるのかを考えて、具体的な科目や授業に具現化したいと思います。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	教頭	学科名	インテリア・建築デザイン科
教員歴	16年	都道府県	愛媛県

●自分の授業改善の目標と課題設定

現在実施している企業と連携したグループワーク（複数のグループに分かれて課題に取り組み、コンペ形式で結果を出す）について、アクティブラーニングの技法を取り入れて、以下の課題を改善発展させる。
・グループ内の取り組みのばらつきを解消し、全員が前向きに取り組む様に誘導する。
・闊達な意見交換ができる場へ支援する。
・チームワークが発揮できるようなプロセスを構築する。
・企業（顧客）情報を正しく聞き取るヒアリング力を養う。
・企業（顧客）へ正しくアイデアを伝えるプレゼン力を養う。
企業と連携したグループワークの内容
企業（又は顧客）から課題※を提示してもらう
※課題は、空室のリノベーションプランや新規物件の提案、古民家再生プランなど
複数のグループを構成し、グループ単位で、プランニング、プレゼン資料づくり、プレゼンを実施する。企業（又は顧客）は、そのプレゼンを受けて、採用案を決定、或いは、改善案を要求し、採用案が決定すれば、実際に施工まで実施する。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	教務課長	学科名	医療秘書科
教員歴	9年	都道府県	鹿児島県

● eラーニングの感想

まずは、今回、このeラーニングを視聴して感じたのは、非常によくできているなということ。
研究者の方々に、プロの方々に、失礼な表現だとは思いますが、率直に感服した。
内容もさることながら、右手にテキストが入り、文字を見ることで瞬時に反芻ができるという感覚。セッションの進行にもスライドが使われ、当然、そこでも十分に分かりやすさはあるが、語り手の一つ一つの言葉が、文字と同時進行で自分の中に取り込まれていく実感を持つことができ、充実感があった。
そして、セッションの中にも出てきたように、研究者が研究を極めていても、伝えるということにおいては秀でていない場合もあるが、どのセッションにおいても、過不足のない分かりやすい表現・説明がなされていて、非常に刺激を受けた。
今まで、eラーニングというものの完成度を、単純にリアルタイムでないものをいつでも手軽に利用できるということと考えていたが、今回は予想をはるかに超えるもので、ありがたい機会を得たと思う。感謝したい。

● AL型授業の広がり理解して、気づいたこと、感じたこと

これまで、「常に教師は商品。興味を持ってもらえなければ、聞く耳を持ってもらえなければ、どんなに内容の精度を高めようが意味がない」と考え、見た目の印象も含め、話し方・スピード・表情を客観視し、授業も双方向であることを意識してきた。
ただ、過去、ここまで純粋に「授業の手法」について論理的に学ぶ機会はなく、AL型授業と似たことをやってきてはいたが、単に自分の中で系統立てて構成していただけで、認知されている「技法」として行っていたものではない。あれだけ技法の種類があることも知らなかった。
今回、一連の流れで、AL型授業を整理されたものとして学び、登場した方々の進め方そのものを目にすることができ、非常に勉強になった。今後に生かしたいと思うが、こなれた域まで到達するのが難しいのだろうと思う。また、基礎学力・理解力・知識欲に欠ける学生に対し、自発的な意見交換や実演を仕向ける難しさが根本にあると思う。意義・技法を理解してなお、場をコントロールできるようになるまで、下準備が相当必要のように感じた。

「アクティブラーニングを使いこなす教員養成研修」実証講座

事前講座の提出課題

氏名		学校名	
役職	教務課長	学科名	医療秘書科
教員歴	9年	都道府県	鹿児島県

●自分の授業改善の目標と課題設定

◆医療系の授業・検定対策など、一方向的な講義になりやすい授業にどう生かすか。
⇒それこそ、学生たちは初めて学ぶ分野について、ダウンロード方式（聞いてノートをとる）で当然と思っている。そこに自発性をもたらすには、授業そのものの構築を変えるべきと考える。ディスカッション、ワークなどで雑談めいた雰囲気にならないよう気を付ける。
◆「理解のレベルに応じた学びがある」ということを実践してみる。
⇒全員が分かる授業を目指し、検定対策の解答解説中に居眠り等で聞き漏らした学生が、隣の学生に質問することで人の時間を奪うのを良しとしていなかったが、「もうよく分かっている人は教えることで学び、よく分かっていない人は教えられることで学びがある」ということで、そういう場を作り、その中で学生たちがどう変わるかをみてみたいと思う。
◆「フィードバックに続く練習の機会と連動させる」
⇒フィードバックさせても、そこで終わると効果が出にくい、また、経験について考えることで学びが成立するというのは、分かっているも時間の制約で流していたところがあるので、時間のやりくりや根本的な時間配分を見直し、場を設けたいと思う。

第5章 実証研修テキスト
別冊テキスト参照

第6章 実証研修受講者アンケート

1. 実証研修の満足度についてお聞かせください。

とても満足 満足 普通 やや不満 不満

理由

()

2. 研修の目的・目標は理解できましたか？

理解できた どちらともいえない 理解できなかった

理由

()

3. 職業実践専門課程の教員用として研修内容は、適切だったと考えますか？

そう思う どちらともいえない そう思わない

理由

()

4. 使用教材についてお聞かせください。

①構成がよい そう思う どちらともいえない そう思わない

②みやすい そう思う どちらともいえない そう思わない

③役に立つ そう思う どちらともいえない そう思わない

理由

()

5. 体験授業(物理)についてお聞かせください。

とても満足 満足 普通 やや不満 不満

具体的に

()

6. ALセッションについてお聞かせください。

とても満足 満足 普通 やや不満 不満

具体的に

()

7. 講師の教え方に関してお聞かせください。

- ①総合的な満足度 とても満足 満足 普通 やや不満 不満
②説明の仕方がよい そう思う どちらともいえない そう思わない
③質問への対応よい そう思う どちらともいえない そう思わない
④時間管理がよい そう思う どちらともいえない そう思わない

理由

()

8. 事前研修（eラーニング）に関してお聞かせください。

- とても満足 満足 普通 やや不満 不満

具体的に

()

9. 研修時間に関してお聞かせください。

- 長すぎる やや長い 丁度良い やや短い 短い

10. 今回学習したアクティブラーニングの内容を自分の授業で実践しようと思いませんか。

- 思う どちらともいえない 思わない

11. 今回学習した実証研修の内容で、どの部分が一番印象に残りましたか？またその理由をお聞かせください。

- ①AL 授業体験と振り返り
②教師介入の構造
③授業研究と振り返り
④AL セッション
⑤その他 ()

12. 今回の実証研修での改善点をお聞かせください。

()

13. その他、ご意見・ご要望、感想等自由に記入してください。

()

集計結果

受講者 21名

1. 実証研修の満足度に関してお聞かせください。

とても満足	満足
18	3

2. 研修の目的・目標は理解できましたか？

理解できた
21

3

職業実践専門課程の教員用として研修内容は、適切だったと考えますか？

そう思う	どちらともいえない
18	3

4. 使用教材に関してお聞かせください。

①構成がよい そう思う どちらともいえない そう思わない

そう思う	どちらともいえない
19	2

②みやすい そう思う どちらともいえない そう思わない

そう思う	どちらともいえない
19	2

③役に立つ そう思う どちらともいえない そう思わない

そう思う	どちらともいえない
20	1

5. 体験授業(物理)に関してお聞かせください。

とても満足	満足
12	9

6. ALセッションに関してお聞かせください。

とても満足	満足	普通	やや不満
15	4	1	1

7. 講師についてお聞かせください。

①総合的な満足度 ○とても満足 ○満足 ○普通 ○やや不満 ○不満

とても満足	未回答
19	2

②説明の仕方がよい ○そう思う ○どちらともいえない ○そう思わない

そう思う	どちらともいえない	未回答
18	1	2

③質問への対応よい ○そう思う ○どちらともいえない ○そう思わない

そう思う	未回答
19	2

④時間管理がよい ○そう思う ○どちらともいえない ○そう思わない

そう思う	どちらともいえない	未回答
18	1	2

8. 事前研修（eラーニング）に関してお聞かせください。

とても満足	満足	普通	やや不満	未回答
2	10	5	2	2

9. 研修時間に関してお聞かせください。

やや長い	丁度良い	やや短い	未回答
5	13	1	2

10. 今回学習したアクティブラーニングの内容を自分の授業で実践しようと思いますか。

思う	どちらともいえない	未回答
18	1	2

11. 今回学習した実証研修の内容で、どの部分が一番印象に残りましたか？またその理由をお聞かせください。

- ①AL 授業体験と振り返り
- ②教師介入の構造
- ③授業研究と振り返り
- ④AL セッション
- ⑤その他

①	②	③	④	⑤	①⑤	未回答
7	2	1	8	0	1	2

第7章 実証講座評価と研修の課題および今後の展望

本事業において開発された研修教材と研修実施マニュアルにもとづいて、2014年12月18日～19日にインストラクショナルデザイン実証講座が、2014年12月20日～21日にアクティブラーニング実証講座がそれぞれ実施された。以下、両者の講義内容、講義方法についてそれぞれ評価を行う。

1. インストラクショナルデザイン実証講座の評価

1-1. 職業実践専門課程制度との関連性に関する評価

平成26年度にスタートした職業実践専門課程制度の目的については、「職業に必要な実践的かつ専門的な能力を育成するため、特に職業に関連した企業、関係施設、業界団体等（以下『企業等』という。）との密接な連携を通じ、より実践的な職業教育の質の確保に組織的に取り組む専門課程を文部科学大臣が『職業実践専門課程』として認定し、奨励することにより、専門課程における実践的な職業教育の水準の維持向上を図り、もって生涯学習の振興に資することを目的とする」とされている¹。しかし、職業実践専門課程の認定制度は、職業と関連した企業、業界団体との「密接な連携」に基づいた「より実践的な職業教育の質の確保」を要求しているが、そのための有効かつ具体的な方法論にまで踏み込んで指示しているわけではない²。

他方、本事業『職業実践専門課程の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証』では、「『職業実践専門課程』の認定基準である企業・業界団体等との連携による教育課程の編成や演習・実習の授業運営等を推進するための研修教材を複数分野を対象として作成するとともに、当該研修教材を用いた研修の実施マニュアルを作成し、実証のための研修を実施する」³ことが求められている。したがって、本事業で開発される「研修教材」「研修の実施マニュアル」「実証のための研修」は、職業実践専門課程制度に謳われた目的を実現するために、企業と密接に連携し、そこから得た知見や情報を教育課程、授業内容、授業運営に反映させるための具体的な方法論を概念的に含んでいるべきだと考えられる。この要件が本実証講座を評価する際の第一の評価観点となる。以下、実証講座の講義内容を記したテキスト（以下「実証講座テキスト」）にもとづき評価を行う。

1 専修学校の質の保証・向上に関する調査研究協力者会議『「職業実践専門課程」の創設について～職業実践的な教育に特化した枠組みの趣旨をいかした先導的試行～（報告）』、2013年7月12日、p.3、(傍点は引用者による)

2 教育課程編成委員会、学校関係者評価委員会の開催を認定要件としてはいるが（同前、pp.5,10）、これらの会議の開催自体は、「より実践的な職業教育の質の確保」に有効かつ具体的な方法論であるとは言い切れない。むしろ、これらの会議をどのように実施すれば、「より実践的な職業教育の質の確保」に有効な知見や情報が獲得できるのか、さらにどのようにすれば、そういった知見や情報を実際の教育課程、授業内容、授業運営に正しく反映できるのか、そのための有効かつ具体的な方法論を究明することがなお課題として残っている。

3 「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」平成26年度「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証」公募要領(傍点は引用者による)

実証講座テキストでは、本実証講座の目的を「職業実践専門課程として企業等のニーズを取り入れるカリキュラム・シラバスの作成ができる教員の養成」であるとしている。その上で、インストラクショナルデザイン理論の適用について、(1)「学校の理念、輩出する人材像、教育目標などから、学科の到達目標」を定めること、(2)「学科の到達目標を達成するための科目群・科目を構成し教育課程」を定めること、(3)「科目の到達目標を網羅するように、半期、通年など、該当期間の科目の到達目標、内容、評価などを決めて、シラバス」を作成すること、(4)「一回の授業の目標、内容、流れ、評価基準などを決めて」コマシラバス(コマ単位の授業計画⁴)を作成することの4段階の手順を挙げている。

したがって、職業実践専門課程との関連性では、とくに「学科の到達目標」に関わる(1)と(2)の手順において、企業等のニーズを反映させるための有効かつ具体的な方法論が必要になる。

しかし、実証講座テキストは、インストラクショナルデザイン理論を適用して、一科目分の学習目標からシラバス、コマシラバスを作成する方法論については扱っているが、企業等のニーズを学習目標や教育課程へと反映させる方法についてはまったく教示していない。むしろ、企業のニーズを反映した学習目標や教育課程がすでに与えられた段階において、インストラクショナルデザイン理論を適用し、シラバス、コマシラバスを作成する方法論を扱っているだけである。

以上のことから、実証講座テキストについて、企業と密接に連携し、そこから得た知見や情報を教育課程、授業内容、授業運営に反映させ、実践的な職業教育の質を向上させる能力を養成する教員養成研修モデルのテキストとして適切かどうかという観点から評価した場合、十分な内容をもっているとはいえない。しかし、企業等のニーズと合致した学習目標、教育課程が完成された後で、専門学校教員が、どのように半期・通年科目のシラバスを作成し、その全コマ分のコマシラバスを作成するかという課題に関しては十分に応えることができている。

1-2. 専門学校教育分野への適合性に関する評価

インストラクショナルデザイン理論自体は、初等・中等・高等教育の特定段階や特定分野に限定されない抽象的な理論であり、専門学校教育分野にどのように適合させるのかという点について、理論の完成度とは別になお評価の余地を残している。

たとえば、同じインストラクショナルデザイン理論であっても、検定済み教科書と学習指導要領に拘束された初等・中等教育分野への適用と、そのような拘束がなく教育課程の形成も含めて自由度の高い高等教育分野への適用は、実務上まったく同じというわけにはいかない。初等教育に携わる教員がインストラクショナルデザイン理論を適用して、自由自在に6年間の教育課程や授業内容を計画し、実行に移すことは実務上不可能であるが、専門学校教員ならば(分野によって相対差はあるが)、比較的自由に教育課程や授業内容を構想し、実行に移すことができる。したがって、専門学校教員に対するインストラクショナルデザイン研

⁴ 以後、「コマシラバス」は、すべて「コマ単位の授業計画」を意味するものとする。

修を効果的なものにするためには、専門学校教育分野の実務に則して一般的な理論をどう適用するかということが課題になる。この点が、本実証講座の第二の評価観点になる。

しかし、専門学校教育分野といっても、その教育内容はもちろん教育方法でさえも専門分野に応じて多様であり、一様に扱うことは困難である。だが、一定の人材目標あるいは学習目標に向かって教育課程が存在し、そこに複数の科目が含まれ、一科目ごとに半期あるいは通年にわたって複数のコマが含まれるという形式は、ほぼ同じなのではないだろうか。このように考えるならば、専門学校教員の一般的な実務のうち、インストラクショナルデザイン理論が影響を与えうる実務として、おもに、複数科目からなる教育課程を編成すること、科目ごとのシラバスを作成すること、科目を構成するコマシラバスを作成することが挙げられる。したがって、実証講座テキストが、インストラクショナルデザイン理論を専門学校教育分野における教育課程、シラバス、コマシラバスの作成にどこまで適合させられているかが問題である。

しかし、実証講座テキストは、教育課程編成の方法論については扱っていない。それは、実証講座テキストが、もともと企業等のニーズを学習目標や教育課程編成に反映させる方法を扱っていないことに起因する。他方、インストラクショナルデザイン理論に基づいた、課題分析図によるシラバス作成、ガニエの9教授事象によるコマシラバス作成については、その方法論を詳しく解説している。この形式化された方法論にしたがうことにより、シラバス、コマシラバスの作成品質に関して個人的な教員経験への依存性を軽減することができる。したがって、実証講座テキストは、シラバスとコマシラバスの作成に限定してではあるが、インストラクショナルデザイン理論を専門学校教員の实務に適合させることができていると評価できる⁵。

ただし、実証講座テキストにはもうひとつ別の問題がある。それは表現上の問題である。実証講座テキストでは、「学習目標」、「ロードマップ」、「授業計画」という用語が注釈なく使用されている箇所が多く、それぞれ、一科目分の学習目標、一科目分の内容展開、一コマ分の授業計画を意味していることが非常に分かりにくい。

たとえば、「学習目標」はそれ自体としては、教育課程全体の学習目標、科目単位の学習目標、コマ単位の学習目標というように様々な水準で捉えられる。「ロードマップ」、「授業計画」も同様である。こういった用語の曖昧さから、専門学校教員受講者が、実務上どの水準の事柄に適用できる方法論を学んでいるのか、講師が口頭で補わない限り、誤解したり疑問を感じたりする場面が少なくないと思われる。今回の実証講座ではテキストの内容に基づいた演習も含まれており、このことが演習実施に混乱を生じさせる可能性もある。実証講座テキストの表現上の問題は、実証講座の専門学校教育分野への適合性をやや損ねているといえる。

実証講座テキストがこのような問題点を含むのは、インストラクショナルデザイン理論のテクニカルタームがもともと専門学校教員の实務に特化したものではないことと、実証講座テキストがもともと多種多様な講師業従事者向けに開発されたテキストを原型としていることに起因するのではないと思われる。

⁵ 実証講座テキストで扱われたインストラクショナルデザイン理論では、シラバス、コマシラバスとは別に「事前テスト」の実施を含んでいる。この「事前テスト」に関しては、専門学校教育分野において実務上、対応関係を見出しにくい。もし、これを制度的に導入しようとした場合、一般的な専門学校では相当の工夫が必要になるとと思われる。

1-3. 講座運営の妥当性に関する評価

これまでに挙げた観点については、実証講座の内容を規定するテキストからほぼ評価できるものだが、さらに講座運営に関する評価観点が考えられる。今回の実証講座が、講師がテキストの内容を淡々と解説するだけのものではなく、グループ単位の演習、討論、成果物発表を含むものである限り、企図したとおりの学習成果を引き出すためには、講師による適切な受講者マネジメントと適切なフィードバックが欠かせない。成果物発表の際に AV 機器を使用するならば、その利用方法にも工夫が必要になる。こういった点が、本実証講座の第三の評価観点になる。

この観点から評価した場合、今回の実証講座では、とくに成果物評価（受講者同士の評価、講師による評価）に関していくつかの問題点が見出された。成果物の評価は、受講者が講義内容にもとづいて実務に近い作業を実際に行えたかどうかを評価するもので、受講者にインストラクショナルデザイン理論に基づく方法論を正確に理解させようとした場合、必要不可欠である。

まず、受講者同士の評価に問題があった。実証講座のグループ分けは原則的に異なる専門分野の教員同士を組み合わせるように行われたが、その結果、グループ討論においてお互いの成果物（学習目標、ロードマップ、シラバス、コマシラバス）を評価しにくいという問題が生じた。実証講座で扱ったインストラクショナルデザイン理論に精通した者同士であれば、専門分野の違いを超えて成果物の相互評価を適切に行うことも可能だと思われるが、初学者である受講者同士では、お互いの専門分野の知識なしに成果物を適切に評価することは非常に難しいと考えられる。実際に、その場でグループごとの様子を観察したかぎりでは、相手の専門分野に関する説明を聞くのが精一杯で、お互いの成果物をインストラクショナルデザイン理論の観点から積極的に評価することはほとんどできていなかった。

また、ロードマップやシラバスの作成演習では、「受講期間が半期もしくは一年の科目」という条件が設定されたため、この想定でロードマップやシラバスを作成すると成果物はかなりのボリューム（文章量）となった。このことも、専門分野の異なる受講者同士の相互評価をさらに困難にさせる要因となった。

講師による成果物評価についても問題があった。成果物（学習目標、ロードマップ、シラバス、コマシラバス）は、受講者同士の評価の後に、グループ単位の発表を通して講師が口頭で評価を行ったが、そのつどの発表物に対するアドリブ的な評価の印象が強く、評価内容の中に作業上の一般的な注意事項やノウハウを見出すことが難しかった。もし、そのようなものがあるならば、事例に則した注意事項・ノウハウ集を事前配布した上で、それを参照しながら講師が受講者の成果物を評価したほうが受講者へのフィードバックという点で効果的だったのではないか。

また、グループ単位の成果物発表の際には、成果物を iPad で撮影し、その画像を会場内に設置したスクリーンに投影して行ったのだが、受講者の席からはスクリーン上の文字が判読しがたく、このこともまた講師による評価の共有を難しくさせる要因となった。

今回の実証講座では、講義だけでなく、インストラクショナルデザイン理論に基づく方法論の正しい理解と定着を狙って各種の演習（学習目標、ロードマップ、シラバス、コマシラバスの作成）を盛り込んでいた。しかし、成果物の評価が十分には行われなかったため効果が半減してしまった。

2. アクティブラーニング実証講座の評価

2014年12月20日～21日に開催されたアクティブラーニング実証講座（全12時間）を受講したが、アクティブラーニングとアクションラーニングについて、以下の3点から評価を試みたい。

2-1. 教育手法としての実効性

2014年12月に中央教育審議会は「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」をまとめた。

それ以来、知識の修得を基本とする受け身的な教育から能動的な学習へと転換を図ろうとする動きが急である。小中学校で進む学習方法の転換の延長線上に高大でも能動的学習の実現を目指そうとしている。

こうした、流れからすると専門学校での学習方法にも生徒・学生が能動的に知識やスキルを修得していく新たな教育手法が求められていることは論を待たない。その一つの方法論としてアクティブラーニングを活用していくことは有効なことであろう。特に、グループダイナミズムを使いながら、個人の学習意欲を喚起し課題の解決を図ることは、以前から企業研修では有効性が実証されており、特に新しい手法ではない。

ただ今回の講座で、1日目に学習するアクティブラーニングは目標の明確化、グループ学習、リフレクションなどの一連のプロセスを重視する学習手法である。これに対して、2日目のアクションラーニングは課題を共有し合いながらグループ学習を行い、そのプロセスの中で組織全体に学習する力をつけるという組織開発の手法である。

この異なる2つの目的や概念が、教員に能動的学習の手法を学ばせるという同じ講座の中で、どのように整理され関連づけられているかは明確にはならなかった。講座受講前にこの2つが、どのように連携しあっているのか、教育手法としてどのように統合されているのかに疑問を持ったが、最後までこの疑問はぬぐえなかった。また、この2つを同時にしなくてはいけない理由もはっきりしなかった。

多分、この講座には教員に能動的な学習方法を修得させるという目的と、教室を学習する組織にしていく手法を修得させるという目的以外に、生徒・学生が社会人になった時に、課題を共有化して問題解決できる人材を育成する手法を修得させるという、いくつかの異なった狙いが混在しており、厳密な意味で事業目的に沿っているかは不明である。

したがって、一般の教員は頭の中では曖昧なままに終わり、明確に整理されて理解できるのであろうかという懸念が残った。そのため、概念やコンセプトのきちんとした整理が必要であると思われる。

2-2. 教員の資質を向上させる観点

講義を中心にして、知識やスキルの付与を重視した教育手法を転換することは、専門学校
の教員にとって、かなりの覚悟がいることであろう。その意味では、アクティブラーニング
は教育手法の意識変革を起こさせる上で、有効な誘引になると思われる。(教育手法として
は、アクションラーニングの位置付けは今後の課題)。

しかしながら、アクティブラーニングはその解釈も手法も様々であり、また、教育現場や
環境によっても、その有効性はまちまちであるので、どれが専門学校の教員にとって受け入
れやすく、有効なのかについて慎重な議論をする必要があろう。

特に、今回の講座では講師自身の経験知と個人技に依るところが大きく、リーダーシップ
論、コーチング論、チームビルディング論、KJ法、ファシリテーション手法などが盛りだ
くさんになっていて、それらの様々な学習体験を経て、今日の手法を体得したものと思われ
る。体系的にすっきりとまとまっているとは言い難く、テキスト内容も整理されていないた
め、一般的に他の教員がそうしたスキルを身につけるには、より一般化し汎用化することが
必要である。

したがって、専門学校でのアクティブラーニングはいかなるものかの基本的議論をきちん
と詰めてから、教員への指導活動をしていく必要があると思われる。また、こうした取り組
みを外部に委託するのではなく、外部の力を借りながらも教員自身が知恵と汗を出し合いな
がら、自分たちのものとして作り込んでいかないと(すなわち、アクションラーニングして
いかないと)、新しい教育手法は本当の意味で、教員に身に付かず現場に根づきにくいと思わ
れる。

2-3. 職業実践専門課程との関連性

2013年7月に「『職業実践専門課程』の創設について」が報告された。その中で、教員の資
質向上について、「企業等との連携の下、職業に関連した実務に関する知識、技術及び技能並
びに、授業及び学生に対する指導力等の修得・向上のための組織的な研修機会を確保する取
組を評価する」としている。

こうした意図を考えると、教員に新たな教育手法や教員の指導力を身につけさせる研修と
いう意味で、アクティブラーニング講座を行うことは意義のあることであろう。ただ、職業
実践専門課程創設の目的を考えると、企業との連携を強く意識しており、研修でもそうした
面での取り組みを求めている。

したがって、今回の講座においても、企業と何らかの形で連携していくことが望ましく、
やり方はいろいろと工夫出来るが、プログラム開発や運営に大学や高校の教員の協力だけ
でなく、企業人との協働にも取り組んだ方が、より職業実践専門課程の構想に適っていると
思われる。

3. 実証講座の評価総括

実証講座を評価する限り、本事業のふたつの分野（インストラクショナルデザインとアクティブラーニング）では、教員養成研修モデルとしての完成度がかなり異なっている。

インストラクショナルデザイン研修に関しては、研修テキストの表現上の問題（実務との対応関係が不明瞭）と研修運営上の問題（演習の成果物評価が不十分）、後述する職業実践専門課程制度との関連性に関する問題を除けば、インストラクショナルデザイン理論に基づいてシラバスとコマシラバスを作成する研修としてほぼ確立できているといえる。研修テキストを専門学校教員の実務に合わせて修正し、演習の成果物の評価方法にもう少し工夫を加えれば、十分に専門学校の教員養成研修として成立できる。

しかし、アクティブラーニング研修に関しては、研修の有効性よりもむしろ、研修が準拠すべきアクティブラーニングの理論、方法論、範例自体が不明瞭で、専門学校教員向けの一般的研修内容としては疑念を抱かせるものであった。ただし、これは本事業における瑕疵というよりも、アクティブラーニングという手法が行政、教育、マスコミ関係者の注目に反して、理論的にも方法論的にも確立しておらず、一般化が可能なほどに効果が十分に証明された成功事例も見出しにくいことに起因するものだと思われる。したがって、現時点でアクティブラーニングに基づく教員養成研修モデルを完成させることは難しいといえる。

さらに、両者に共通な課題もある。職業実践専門課程制度で謳われている企業等との連携性が弱いという点である。これは本事業の題目『職業実践専門課程の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証』に関わる重要な問題である。しかし、インストラクショナルデザイン研修に関しては今後の改善課題が明確であり、インストラクショナルデザイン理論に基づいて、企業のニーズを学習目標、教育課程に反映させる方法論を確立し、それを研修として組み立てればよい。拡大されたインストラクショナルデザイン研修では、シラバス、コマシラバスだけでなく、企業ニーズの取り込みと教育課程の形成が方法論の一部として組み込まれるはずである。他方、アクティブラーニング研修では、企業との連携性を組み込むことは前述の問題により容易ではなく、まず有力なアクティブラーニングの理論、方法論を見出す必要がある。

4. 今後の展望

職業実践専門課程制度では、企業と連携して教育課程を編成するための教育課程編成委員会の設置が義務づけられている。たしかに、企業関係者を集めて教員とともに教育課程編成委員会を開催することはそれほど困難ではない。しかし、実践的な教育課程編成に資するような教育課程編成委員会の一般的な運営方法が確立し、普及しているわけではない。教育課程編成委員会において、どのように企業情報を収集し、どのように教育的立場から評価を下すのか。そこからどのように教育課程を組み立てるのか。これはインストラクショナルデザインにとって範疇外の対象を含むかもしれないが、この過程とシラバス、コマシラバス作成を連続したひとつの方法論として確立できたときに、インストラクショナルデザイン研修は、文字通り、「職業実践専門課程の推進を担う教員養成研修モデル」として完成することができる。

他方、アクティブラーニング研修に関しては、まず、効果が十分に証明されたアクティブラーニングの成功事例を見出すことから始めなければならない。もちろん、専門学校教育分野から発見されれば理想的である。その成功事例から職業教育一般へと応用できる要素を見出し、専門学校教育分野に一般的に適用できるひとつの方法論を確立することが必要である。専門学校教育分野に適用する場合の限界や制約も見出す必要がある。アクティブラーニング研修が企業との連携性を追求するのは、さらにその次の段階の作業ではないかと思われる。